

晋樹隆彦

幸いなるかな

昨年の二月頃だったか、久しぶりにカリフォルニアの青木泰子さんから連絡を受けた。三冊目の歌集を刊行したいと言う。

ところが、膀胱癌が見つかり近く手術をされると言う。癌の中でもっとも危険な部位。これは大変、覚悟の上の人生の決算かと案じた。

「心の花」への入会もほぼ同時期、互に十八歳頃のことである。以降、夏の全国大会終了後は必ず各地へ温泉を兼ねた旅をした。小生の社の社員だった住正代さんや西田郁人さんいつも一緒だった。

私の娘が高校からアメリカへ留学することになった時、私も初めて青木さんの住むサンノゼへ同行し、以降、三度ほど青木さんやご主人のスチーブさん、娘のヴェロリイさんに大変お世話になった。

三冊目の歌集のタイトルは「幸いなるか

な」。旧約聖書の「幸いなことよ／悪しき者のはかりことに歩まず」から得たと言う。アメリカへ渡ってから三度目か四度目の引越先での作品集である。

・早春の河畔に居住地決められて人の行き来の陽炎むらさき

・カリフォルニアゆ時差一時間のフェニックス角にはここもスターバックス

・南北のコロラドリバーが州境そを目印に飛ぶ秋の鳥

歌集の初めの歌である。川のほとりに近い新しい居住地に、夫婦と娘のヴェロリイ夫婦やお孫さん達と住むようになった。コロラドは私の娘が極寒のサンノゼに耐えられずコロラドへ移住した地、高校を終えた卒業式へ私もはるばる赴いた地で、遠く離れているといえ、地名だけでも懐かしい所である。なにかその土地のイメージが浮かんでくる。

・ひたすらな思いそのままアメリカの桜よさくら泣いてもいいですか

・アジアンであることなんで悪からう桜はなびら四月の黒髪

・差別するされた思いの半世紀鏡に映す今のショートカット

日本で桜の咲く頃に私の営む社を訪れたことがあった。今は亡き住正代さんともども社の近くの九段へ桜を愛でた日が忘れられない。作者には桜を眺めながら、亡き父母や日本への思慕が強く甦えるのだろう。長く米国に居住してもアジアの日本人、世は移れども白人と異色人種とは越えがたい宿命を詠んでいよう。三冊目の作に率直に詠まれていよう。

さて、かつて長く住んでいたサンノゼの山々は幾度も大きな山火事に見舞われている。何しろ日本国よりも広いカリフォルニア州、火事の規模も尋常では無い。

・夜に入りて炎逆巻く丘陵に揺れつつ燃える樹の音がする

・梢より燃ゆる立ち木はことに夜天地の間にゆれつつ叫ぶ

・焼け跡に立ちて相抱く三人の家族を遠く撮るカメラマン

広大なカリフォルニアの山中、ひとたびの火事による焼尽の規模は想像を絶するのであろう。炎は峡谷から人家の近くへ、日本では有り得ない光景であろう。